

「忠臣蔵を考える」

群馬県立女子大学教授 北川 和秀

赤穂事件関係年表

將軍	年号	西曆	月日	事項
家光	正保二	一六四五	六・三	浅野長直、播磨国赤穂に移封
家綱	寛文元	一六六一		赤穂城完成
	七	一六七	八・二	浅野長矩、江戸本邸に生まれる
	延宝三	一六七五	三・三	浅野長矩、襲封(9歳)
綱吉	天和三	一六八三	二・六	浅野長矩、勅使饗応役を拝命(17歳)
			三・七	吉良義央、高家肝煎となる(43歳)
			二・五	浅野長矩、勅使饗応役を勤める
			四・九	あぐり(12歳)、浅野長矩に輿入れ
	元禄元	一六八八	二	柳沢保明、側用人となる
			二・三	備中松山改易に際し、浅野長矩、受城使
			二・二	中山安兵衛、高田馬場で決闘(25歳)
			一・八	吉良義央、年頭の賀使として御所に参内(61歳)
			二・四	浅野長矩、勅使饗応役を拝命
			二・九	吉良義央、江戸に帰着
			三・二	勅使・院使、江戸に到着
			三	勅使・院使、將軍綱吉に拝謁
			四	浅野長矩、吉良義央に刃傷。長矩、即日切腹(35歳)
			五	浅野大学、閉門。赤穂受城使任命
			七	浅野家上屋敷等収公
			九	急使、赤穂に到着
			一〇	赤穂藩で藩札引き替え開始
			二六	吉良義央、役職辞任
			二七	赤穂城中において大評定始まる
			四・六	受城使、赤穂城下に到着
			九	城明け渡し完了
			六・五	大石内蔵助、赤穂城下を退去

將軍	年号	西曆	月日	事項
	五	一七〇二	二六	大石内蔵助、京都山科に転居
			八・九	吉良義央、呉服橋門内から本所一ツ目へ屋敷替え
			三・三	吉良義央、隠居
			一・二	第一次山科会議
			四	菅野三平切腹
			二・五	第二次山科会議
			四・五	大石内蔵助、妻子を離別
			七・八	浅野大学、広島浅野本家に永の預かりとなる
			二八	円山会議。仇討ち決定
			一〇・七	大石内蔵助、京都を立出
			三	大石内蔵助、鎌倉に到着
			二六	大石内蔵助、川崎に到着
			二・五	大石内蔵助、江戸に到着
			二九	大石内蔵助、金銀請払帳を瑤泉院用人に提出
			三・五	討入り予定日。將軍の柳沢邸お成りのため延期
			四	赤穂浪士、吉良邸に討入り。義央を討ち取る
			五	赤穂浪士、大名四家にお預け
			三	幕府で評定が行われる
	宝永元	一七〇四	二・四	赤穂四十六士、切腹。 吉良義周は信濃高島に配流
			四・七	四十六士の遺児で十五歳以上の者を伊豆大島に配流
			六・二	上杉綱憲、江戸で没す(42歳)
			八・八	吉良義央の妻富子、江戸で没す(62歳)
			一・二〇	吉良義周、配流先の信濃高島で没す(22歳)
			八・二	桂昌院一周忌の大赦により、大島配流の遺児、赦免
			一・二〇	將軍綱吉没す(64歳)
			八・二〇	綱吉死去の大赦により、浅野大学赦免
			九・六	浅野大学、五百石を賜わり、浅野家再興
			二七	内蔵助の遺児大三郎、浅野本家に千五百石で仕官
			六・三	瑤泉院没す(43歳)
			六・三	多門伝八郎没す(65歳)
			八・四	寺坂吉右衛門没す(83歳)
			二・六	大坂の竹本座で人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」初演
				江戸の森田座で歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」初演

今朝公卿拜謁のため、表にわたらせらるるころ、留守居番梶川与惣兵衛頼照は御台所御使奉はり、公卿の旅館に赴くにより、その事議するとて、白木書院の廊下にて、高家吉良上野介義央と立ながら物語せしに、館伴浅野内匠頭長矩義央が後より、宿意ありといひながら、少さ刀もて切付たり。義央驚き振むく所、また眉間を切る。与惣兵衛頼照はそのまゝ長矩を抱留しに、義央が同僚もかけ集り、義央をも引立て他所にまかる。よて公卿の拜謁も黒木書院にて行はる。長矩をば目付天野伝四郎富重、曾根五郎兵衛長賢請取、蘇鉄間杉戸の内に入れて、目付多門伝八郎重共并に徒小人目付多くつきそひたり。先義央に意趣をたゞされしに、更に覚なきよしを申により、義央は乗物にのらせ、平川門より帰宅せしめ、長矩は田村右京大夫建頭にあづけられ、館伴をば戸田能登守忠真にかへ命ぜらる。

かくて目付鈴木源五右衛門利雄、五郎兵衛長賢をば伝奏郎につかはされ、長矩が家人の騷擾を静めしめらる。親縁戸田采女正氏定も同じ事奉りてまかる。長矩が宅には目付伝八郎富重、近藤平八郎重興つかはされ、親縁采女正氏定、水野監物忠之、小姓組番頭戸田伊豆守政倚、山田奉行浅野美濃守長恒をもつかはさる。義央が宅にも高家品川豊前守伊氏、目付逸見五左衛門義永をつかはさる。

この夜大目付庄田下総守安利、目付大久保権左衛門忠鎮、多門伝八郎重共を右京大夫建頭が宅につかはされ、長矩に死をたまふ。時所をもわかまへず、ひが拳動せりとてなり。

この長矩は采女正長友が子なり。延宝三年三月廿三日家つき五万石を領し、その四月七日初見し、八年八月十八日叙爵し内匠頭と称し、三十五歳なりしとぞ。

また義央は罪なきに、刀疵治療すべしとの御旨を、高家畠山民部大輔基玄、大友近江守義孝、大目付仙石伯耆守久尚つたふ。(日記、寺伝、憲廟実録、藩翰譜続)

(世に伝ふる所は、吉良上野介義央歴朝当職にありて、積年朝儀にあづかるにより、公武の礼節典故を熟知精練すること、当時その右に出るものなし。よて名門大家の族も、みな曲折してかれに阿順し、毎事その教を受たり。されば賄賂をむさぼり、其家巨万をかさねしとぞ。長矩は阿諛せず、こたび館伴奉りても、義央に財貨をあたへざりしかば、義央ひそかにこれをにくみて、何事も長矩にはつげしらせざりしほどに、長矩時刻を過ち礼節を失ふ事多かりしほどに、これをうらみ、かゝることに及びしとぞ。)

(『徳川実紀』元禄十四年三月十四日条)

* 『徳川実紀』は江戸幕府が編纂した徳川家の歴史。全五一六巻。文化六年(一八〇九)着手、嘉永二年(一八四九)成立。

去年管中にて吉良上野介義央を刃傷したるにより、死をたまひし浅野内匠頭長矩が家臣大石内蔵助をはじめ四十六人の輩、上野介義央を主の讐なればとて、昨夜吉良が本所の宅に夜討し、義央が首をとり、その子左兵衛義周に手負せ、吉良が家人十六人切殺し、二十人に手負せ、のこりなく引取、亡主の菩提所芝泉岳寺にいたり、義央が首を亡主の墳墓に手向。さて後その党中吉田忠左衛門、富森助右衛門兩人を、大目付仙石伯耆守久尚がもとに使い、我等、亡主の遺恨を散せんがため、此年月心身を苦しめ、其志をば達しき。今にいたりては、たゞおほやけの御刑法に身をまかせ奉るよしを申出ぬ。よて伯耆守久尚が宅に、内蔵助をはじめかの輩を呼よせ、目付鈴木源五右衛門利雄、水野小左衛門守美会し、内蔵助はじめ十七人は細川越中守綱利に、その長子主税をはじめ十人は松平隠岐守定直に、岡島八十右衛門はじめ十人は毛利甲斐守綱元に、間十次郎はじめ九人は水野監物忠之にあづけらる。また目付阿部式部信旨、杉田五左衛門勝行は、左兵衛義周が宅につかはされ捻点せしめらる。(家譜、日記)

(世に伝ふる所は、去年の弥生十四日勅使に御返詞あるおりから、浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央に恨有とて刃傷せしかば、長矩は速に自殺せしめられ、義央は癪をやしなひ、もとのごとく出仕すべしと命ぜられき。やがて長矩が封地に御使を立てられ、居城収公あるべき旨、かの地に仰下されしに、長矩が家司大石内蔵助といへるは、心ふかき男子なりしかば、家中の土三百余人を城に召集め、こたび事不慮におこりて主家滅亡するは、なげきてもあまりあり、されど公に対していさゝかうらみ奉るべきにあらず。たゞ恨る所は主君の志とげず、吉良殿其まゝ存在すれば、亡君没前の恨散がたし。我々が身に在いては、吉良殿こそ不共戴天の讐なれ。されど今に在いていかにともなしがたし。しからば城受取の御使を待受、諸共に城を枕に殉死せんはいかにと申ければ、みな異口同音に、仰にや及ぶべきと答へしに、とみに使をばせて、亡君の親縁戸田采女正氏英にうたへたり、氏英これを聞、長矩は生涯上を重んじ、一事として上裁をそむかねば、その家人等も、公の御沙汰のまゝに城をあげ渡し、おだやかに其地を引払ふこそ、亡主の宿意にかなふべけれ、御使に対し自殺などせん事、上をおそれざるに似たり。ゆめゆめしかるべからずとねもころに曉諭せり。此時にいたり三百余人の者ども、半は初の心をひるがへし、ひそかに城を出てうせたり、されど内蔵助等はじめ城にのこりし輩は、長矩が弟大学長広すでに公にめし出されてあれば、かれをもて亡主の遺跡をつがせ給はん事を懇願し、しばらく憤をこらして、城地を難なく引渡し、先心々に各所に離散し、此うへにも大学長広に、長矩が祀を奉せしめられんには、こたびの恥を忍ぶべし。もしさもなくば、その時殉死せんとして、血誓せしものは六十余人に過ぎりしとぞ。内蔵助もより志厚く智深ければ、これより妻をも出し、親族にもはなれ、京山科のほとりに閑居し、いさゝかも武を講ずるさまはなまず、日夜倡家に入し、酒に沈酔し、ひたすら無頼の淫行をあらはし、報讐の志などあるべくもなくふるまひしかば、吉良が方にも初こそあれ、この風説を聞つたへ、さては心安しとて、戒心もをのづからおこたりしとなり。しかるにこの七月大学もつみに采邑をうばわれ、宗家松平安藝守綱長にあづけられしかば、此時に至り血誓をそむき、にげうせしものまた

すくなからず、たゞ内蔵助が輩四十六人、始終義を守り心を変ぜず、今は義央に仇を報ずるより外なしとて、秋の程より同じく府に來り、あるは行商となり、あるは工人となり、吉良が家をつかゞひしが、近頃義央は致仕し茶事を專にし、此日しも大友近江守義孝を招き茶会を催すよし聞、おりふし連日大雪なりしをよき折とおもひ立、遂に夜中に吉良が宅にをしかけ、亡主の仇を報ずるよし高声によばゞり、弓をいかけ、鎧長刀を打ふりつゝをし入、思ふまゝに志をとげたりとぞ。げにも四十六人の者共が、志を同じくし義を一にし、人のなしがたき事をなし得つるは、その類あるまじくこそ。猶次の巻二月四日の小註を併せ見るべし。(続武家評林)

(『徳川実紀』元禄十五年十二月十五日条)

去年吉良上野介義央がもとにをし入て、主のために報讐せし故浅野内匠頭長矩が家臣大石内蔵助を初め四十六人の輩、国禁を犯し党をむすび、飛具を用ひ、公をはゞからずとて共に死を給ふ。よて兼て召あづけられし細川越中守綱利が邸には目付荒木十左衛門政羽、使番久永内記信豊、松平隠岐守定直が邸には目付杉田五左衛門勝行、使番駒木根長次郎政方、毛利甲斐守綱元が邸には目付鈴木次郎左衛門福一、使番斎藤次左衛門利常、水野監物忠之邸には目付久留十左衛門正清、使番赤井平右衛門時尹まかりのぞみ、大目付仙石伯耆守久尚、目付長田甚左衛門長視命をつたふ。内蔵助はじめ此輩の子弟はみな遠流に処せらる。

表高家吉良左兵衛義周も、その夜のはからひよからずとて、采邑収公せられ、諏訪安藝守忠虎にあづけらる。(日記)

(越中守綱利にあづけられしは、大石内蔵助、吉田忠左衛門、原惣右衛門、片岡源五右衛門、間瀬久大夫、小野寺十内、間喜兵衛、磯貝十郎左衛門、堀部弥兵衛、近松勘六、富森助右衛門、潮田又之丞、早水藤左衛門、赤垣源蔵、奥田孫大夫、矢田五郎右衛門、大石瀬左衛門。隠岐守定直に預られしは内蔵助が子主税、堀部安兵衛、中村勘助、菅谷半之丞、不破数右衛門、千馬三郎兵衛、木村岡右衛門、岡野金右衛門、貝賀弥左衛門、大高源吾。甲斐守綱元に預られしは岡島八十右衛門、吉田沢右衛門、武林唯七、倉橋伝助、村松喜兵衛、杉野十平次、勝田新左衛門、前原伊助、間新六郎、小野寺幸右衛門。監物忠之に預られしは間十次郎、奥田定右衛門、矢頭右衛門七、村松三大夫、間瀬孫九郎、茅野和助、横川勘平、三村次郎左衛門、神崎与五郎。以上四十六人なり。

さても此一公案むかしより区々の私言やまず。其故は、かゝる忠義の輩を褒顕せらるゝまではなくとも、常人の刑をもて、結党の科に処せしめられし事、人ごとにいかにも口惜き事なりとてなり。そは当時も、其義を賞して助命せんといふもあり。又は此輩が主のためにしをもて、助られんに於ては、此後罪蒙りしものゝ臣子報讐を名とし、ひがふるまひして、大乱を引出すもひととなるまじきにもあらずといふもあり。在朝諸大臣の議一決せざりしかば、日光門主公弁法親王に議せられしに、かれら年月身をくるしめ思ひを焦し、

主の仇を報ぜしはさる事ながら、その志ははや成りぬ。今はこの世に思ひのこす事なければ、公の刑に身をまかせ奉らんとこひ出ぬる上は、今さらその罪をゆるし給ふとも、彼等再び他家に身をよせ、二君に仕ふべきにもあらず。あたは忠義の士を、山林窮谷に飢餓せしめんよりは、公より武士の道をたてゝ死をたまはらんには、彼等が志も空しからず、公の刑法も正しく、かれもこれも事かゞず、天下の公論たるべしと定られしかば、みなこの義言に決したりといへり。此説誠なるに於ては、公弁法親王を当時御寵待厚かりしもさる事にて、実に卓越の決断ある御人とはしられぬ。彼等雜人の刑に処せらればこそ、うらむる方もあるべけれ、本志既に成しうへ、公より大法を犯せるをもて刑に処せらるゝといへども、猶その忠義を愛憐ありて、武士の道をもて自裁せしめられしは、かへりてその志を感ぜられ、その義を褒せらるゝ所にして、誠に公平の処置とこそ申べけれ)

(『徳川実紀』元禄一六年二月四日条)

浅野内匠家来口上

去年三月、内匠儀儀奏御馳走之儀に付、吉良上野介殿へ意趣を含み罷り在り候処、御殿中に於いて当座遁れ難き儀御座候か、刃傷に及び候。時節場所を弁へざる働き無調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地赤穂城召上げられ候儀、家来共迄畏れ入存じ奉。上使の御下知を請ひ、城地を指上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩之節、御同席御抑留之御方これに在り、上野介殿討留め申さず、内匠末期残念之心底、家来共忍び難き仕合に御座候。高家御歴々に対し、家来共鬱憤を挟み候段、憚に存じ奉り候得共、君父之讐は、共に天を戴くべからざるの儀、黙止し難く、今日上野介殿御宅え推参仕り候。偏に亡主之意趣を継ぎ候志迄に御座候。私共死後、若し御見分之御方御座候はば、御披見願ひ奉ること、かくの如くに御座候。以上



「大忠臣蔵」(昭和32、松竹)北上弥太郎・石黒達也



松の廊下の襖絵の下絵



「忠臣蔵」(昭和33、大映)市川雷蔵・滝沢修



「赤穂浪士」(昭和31、東映)東千代之介



「忠臣蔵」(昭和34、東映)中村錦之助・進藤英太郎



「赤穂浪士」(昭和36、東映)大川橋蔵・月形龍之介

「忠臣蔵」(昭和37、東宝)加山雄三





「忠臣蔵」(昭和60、NTV) 風間杜夫・森繁久弥



「元禄太平記」(昭和50、NHK) 片岡孝夫・小沢栄太郎



「赤穂城断絶」(昭和53、東映) 西郷輝彦



「忠臣蔵」(平成15、テレビ東京) 上川隆也・橋爪功



「元禄繚乱」(平成11、NHK) 東山紀之



「忠臣蔵」(平成16、テレビ朝日) 沢村一樹・伊東四朗



「忠臣蔵1/47」(平成13、フジTV) 堤真一